

いま一たびかのいとけなき群に入り遊戯せまほしなやみもなくに
青黒く淀める沼を樹洩れ日の光りしらくうつる淋しさ
つゝましく野菊と並びわが犬は水の面の雲に見入るなりけり
秋の丘草叢行けば入りつ日に蛇の骸の薄光れるも
秋の丘段々畑の芋の葉に夕風そよぎて月出でんとす

(小學校を過りて)

習作三篇

二二、甲二

原

田

弘

海^〇の^〇唄^〇——

- わたつみはいと静やかに揺めきぬ黄金白銀朝日の昇る。
- 砂白し踏めば、いさごのすくさくとわが足跡の消ねもやらすも。
- かにかくに渚歩かむ一日をかくてすぐさば憂ひ消ぬべし。
- 月夜よし舟やるもよし歌ふよし今宵嬉しき波のささやき。
- その夜をば忘れざらめと歌日記筆そめにける寂び心よな。
- 海十裡いざり火遠くつゝきけり嬉し今宵の渚の聲の。
- 悲しみは藻の香する夜にはじまりぬその夜淡月潮鳴の宵。
- 銀の川南に流る戀ふ人を星に詠む夜の今宵の唄は。
- 淋しさは君のことばの少なくて吾が胸あまり暖かき時。

離愁篇

- あゝ離愁思へば君がかほも見ゆ白砂三里の砂はまも見ゆ。
- 魂まつる夜の灯影の仄の暗きかげに見出でし君なりしかな。
- 美しき君を忘れず永劫に海のひと夏思ひ出として。
- あはつけきそのひと夏の思ひ出にわれ泌々と別れを思ふ。
- 海の人みな果敢なしと君言ひぬかくいふ君をいとほしそめぬ。

谷に來て。

- とんぼ飛ぶ吾が逃れ來し谷あひの山さき村のもろこし畑。
- 何故のいぢけ心ぞ谷深くこもりて今日も送らむとする。
- 悲しみを捨てに來してふ若人の心泌々鯛をまき。
- 逃れ來て吾がこもりける阿蘇谷に瀧津瀬の音心乱すも。
- みづからを唐の朱塗の籠に入れ歌なし鳥と君に呼ばれむ。
- 歌も棄つかにかくにして戀も捨つ人間性を失ひしわれ。
- 便りする。谷にこもりて五日なり心癒へけり戀も捨てぬと。